

「河北潟・干拓地の有効な利用」シンポジウム開催される



約100人が参加して活発な討論がおこなわれた。

「河北潟及び干拓地の将来構想」募集の一環として、6月30日に内灘町民ホールにおいて、河北潟湖沼研究所の主催によるシンポジウムが開催されました。この中でおこなわれたパネルディスカッションでは、干拓地生産者をはじめとする9人のパネリストが問題提起をおこない、その後会場からの質問や意見が相次いで、活発な討論が繰り広げられました。高校生による市民へのアンケート活動の報告や、河北潟の水質の改善についての意見、干拓地における野鳥による農作物の被害の実体についての報告、同時に環境を守り

ながら農業に取り組んでいる生産者の報告など、地域を構成するさまざまな分野の人たちが参加して、潟と干拓地の問題が話し合われました。

河北潟湖沼研究所では、今後2年間にわたり、河北潟の自然環境の修復や水質の浄化、野生生物との共生、干拓地農業経営の活性化などのアイデアを、石川県在住の子供からお年寄り、農業関係者やレジャー利用者、一般市民等から広く募集します。多くの方々からのさまざまなアイデアが寄せられることを期待しています。(関連記事：3P)

かほくがた
カコちゅん
ジョウく
チルドレン



河北潟湖沼研究所生物委員会では、河北潟と周辺水域の水草の調査を実施しています。その中で、河北潟の水草が危機的状況にあることがわかってきました。

数年前までは、西部承水路の広範囲に点在していたアサザは、今年は数力所できわめて小さな群落を確認されているだけです。数年前までは、西部承水路で毎年大群落を形成していたトチカガミはほとんど消滅しています。皮肉なことには一番の安定した自生地が捨てられた古い舟の中となっています。その他数地点で数株の生き残りが残っているだけの状況となっています。

一方、数年前にはみられなかった外来種のホテアオイの群落が広範囲に認められるようになりました。また、西部承水路では越冬して生き残っている株もみられるようになりました。ホテアオイが越冬するのはここ2 - 3年の傾向です。枯死せずに越冬する個体があることによって、近年の夏季のホテアオイの爆発的な増殖が起こっているようです。ヒシやマツモの群落は、まだ多くの地点で確認できます。1か所のみでしたが広範囲に芽生えが確認されました。マツモ以外の沈水植物はきわめて少なくなりつつあります。

アサザ、トチカガミ、マツモ以外の沈水植物については何らかの保全対策を講じないと、ほぼ消滅することが確実な状況です。生物委員会では、とりあえず系統の保存対策はおこなっていますが、いうまでもなく自生地の保全が最重要です。

今、次の世代にどのような河北潟を残していくのか、河北潟の環境の大きな変動に立ち会った私たち世代の活動が問われています。河北潟の水草の系統保全への取り組みは、単に希少生物を守るという意味だけでなく、自然の財産や地域の風土を継承していくことの意味を考えることでもあると思われます。(生物委員会:高橋久)

「河北潟・干拓地の有効な利用」シンポジウム・実行委員会からの報告

河北潟及び干拓地の未来が、夢のある有用な“場”となるために「将来構想」が必要であるとの考えから2年間にわたり構想募集を実施する事になりました。その実施にあたり、6月30日、研究所主催のシンポジウムが開催され、大勢の関係者、行政、市民が参加しました。

始めに大館小夜子理事長から開催の挨拶と、日ごろのお礼と今後の協力依頼が述べられました。次に大串龍一実行委員長から構想募集のねらいが報告されました。

来賓の桑原豊、奥田建両衆議院議員からは熱い励ましのメッセージが述べられ、内灘町の齋藤助役は、地球環境の深刻さから環境事業への理解が語られました。

定塚謙二研究所所長の司会で進められたパネルディスカッションでは、パネラーの二水高校(ボランティアキャンプ)の菊野聡子、小坂謙介さんが、現地でのインタビュー結果を報告、身近な河北潟の環境を通じて環境問題全体や社会問題にも関心が広がったと発表がありました。南手骨太さん(自由研究室、ボランティアキャンプ事務局長)からは子どもの気持ちを支え、環境学習の重要性を、協働の立場から報告されました。

河北潟沿岸土地改良既成同盟会長の長井賢誓県さんは、県の政策援助に尽力をしたいとの力強い支援の意思が報告されました。

酪農経営者の川上充紀さんは夢を持って干拓農業に取り組み希望の願いが語られ、過去の計画が常に立ち消えとなって来た経緯が述べられました。また有機畑作農業に取り組んでいる井村辰二郎さんからは、多くの生産者の頑張りや、消費者の安全な食料供給を支えていると、農家の苦労の様子が語られました。

石川県の農林部長、副知事を務められた岩本荘太参議院議員からは、現在の干拓地の利

用形態が本来の土地の条件からは適した利用方法となっていないことや、県の過去の干拓地管理の経緯が述べられ、農業政策がスタートから困難であった様子が述べられましたが、今後の取り組みへの期待も述べられました。

研究所の沢野伸浩星稜大学助教授(研究所理事)は最近の衛星写真で、干拓地と河北潟の様子を説明しました。高橋久研究員(研究所理事)は生態系の変化について日ごろの研究成果から報告がされました。また、河北県議会議員の木本利夫議員も、河北潟流域の議員として、共に問題解決に取り組む事が重要との意見が述べられました。

会場からも積極的な取り組みを求める声が出、対策が遅いとの意見が述べられました。環境と農業の野鳥被害の問題についても深刻な被害があることから、農業者が野鳥の餌を供給していて、餌をやらないで世話もしないで、野鳥が大事だという自然保護については、気持ちは理解できるが、一方的な押し付けは、生産者として納得ができないとの意見も述べられました。その他様々な状況、意見が報告されました。

環境と自然のバランスは、構想の中でどのように盛り込んでいくか、農業と水質保全、浄化の関係、農地の活性化、生産性向上の問題など、多くの課題を理解し、こうした問題を考慮しながら構想を作る事が必要だとの事が共有できました。

自然と農業のどちらも大切な状況を、折り合いのつく方策として盛り込む事が出来たら素晴らしいと思います。さて皆様は「河北潟及び干拓地の未来構想」をどんな未来構想にしたら良いでしょうか？ 皆様の応募をお待ちします。(構想募集実行委員 大館 薫子)

『河北潟自然再生協議会』が発足

河北潟地域で活動する住民団体が中心となって結成された「河北潟自然再生協議会」の設立総会が、さる7月28日に金沢市福祉保健センターを会場に開催されました。住民など約150人が参加して開催された総会では、協議会規約の採択、役員選出、『河北潟の自然再生構想(案)』および当面の活動方針の採択がおこなわれました。最後には設立総会宣言が朗読され、大きな拍手で確認されました。

総会後の記念講演会では、京都大学大学院教授の松井三郎氏より「世界と日本の湖沼がかかえる問題とその回復」と題して、世界の湖沼の問題とその原因、解決のための方法についての講演が行われました。

河北潟の周辺の水路調査を実施中

河北潟湖沼研究所生物委員会では、不定期ではありますが、河北潟周辺の用水路の生物調査を実施しています。

用水路には水草や二枚貝、水生昆虫、メダカなどが生息していますが、最近河北潟周辺では、生物が豊富に生息する水路が少なくなってきました。これまでの調査では、4年前の調査と比べ、浮葉植物のトチカガミがほとんど消滅していること、西部承水路ではアサザの生息地点が半以下になってしまったことが確認されました。また昨年まで確認されていた、サクラタデが



水路調査の様子

消滅しました。一方新しくできた休耕田で、これまで確認されてなかった、クログワイやホソイが確認されました。



西部承水路

2003カレンダー「河北潟の希少植物」制作中

2003年カレンダー「河北潟の希少植物(仮題)」を現在製作中です。今回は植物学者の白井伸和氏に写真を提供いただきました。河北潟地域では消滅寸前のトチカガミやアサザ、サクラタデなどを紹介し、河北潟に残る貴重な自然財産を知っていただくとともに、これらの種や生息環境の保全の取り組みへつなげたいというねらいがあります。10月上旬頃には完成の予定です。また、次号の「かほくがた」で詳細をご紹介する予定です。

< 編集後記 >

河北潟をめぐる動きが活発になってきました。住民からは「河北潟自然再生協議会」の発足や釣り団体などの活動が活発になっています。干拓地の利用のあり方については、農家の取り組みとともに県が検討会を設置する動きなどがあります。河北潟湖沼研究所のNPO法人としての活動がいよいよ重要になってきていると感じています。(T)

「かほくがた」通信 VOL.8 NO.1

2002年7月31日発行

発行所 河北潟湖沼研究所友の会

〒920-0051 金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所金沢事務局内

TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435